

東洋大学福祉社会開発研究センター News Letter

2022_Vol.2

福祉社会における新たな価値の創発と支援システムの構築

INDEX

- ◆ 前期シンポジウムの開催 . . . 1
- ◆ 各研究ユニット・グループの様子 . . . 2
- ◆ お知らせ（今後の研究会等の予定） . . . 7



前期シンポジウムの開催

9月 25日（日）9:00-11:30、福祉社会開発研究センター前期シンポジウム「福祉実践における科学技術活用のこれから」がオンライン形式で開催されました。

まず株式会社やさしい手 香取社長より基調報告がありました。介護現場にICTを導入することによって、ウェブを通じてつながりあい、同意や共感の中で、在宅生活継続支援を支えることが可能となったとのことでした。次に藤木聡美研究分担者より「医療的ケアが必要な児童による分身ロボットOriHimeを介した出席の試み」と題した発表がありました。現在、センターで取り組み始めているOriHime研究について、その概要の紹介がありました。また大川秀治客員研究員より「オンラインボッ

チャを活用した志村ゼミ生との取り組みについて」と題した報告がありました。オンラインボッチャとは、ランプ（スロープ）をオンラインにて制御することにより、誰でもどこでもボッチャに参加することができる装置および競技名です。Zoomとタブレット等のコントローラーを用いて、自宅等から競技に参加することができます。東洋大学の学生と一緒にオンラインボッチャに参加した当事者の方からも「面白かった」といった感想が聞かれました。

以上の事例を受け、稲沢公一研究分担者からは、ICTが承認を可能にする場の設定と拡張を実現しているとコメントがありました。さらに横田祥研究分担者からは工学的観点からさまざまなコメントをいただきました。



各研究ユニット・グループの様子－地域福祉グループ

7月

4日（月）10：00～12：00

に、第3回研究会が開催されました。洪研究分担者、大洞客員研究員より、地域福祉分野におけるICT活用の先進事例として、黒部市社会福祉協議会のくろベネットICT利活用プロジェクトについて紹介がありました。また、質的研究の進捗として昨年度調査に続き3法人へのFGI調査の継続に向けた素案が提示されました。メンバーでのディスカッションとして、アフターコロナも見据えて地域福祉活動におけるICT利活用の進捗状況、ICT等の利活用に対する方針の分岐の有無、地域に孤立している方へのアプローチ方法に関する改善策といった視点にフォーカスをあてていくことが重要であることが話し合われました。

量的調査では、早坂研究分担者より老健事業を中心とした調査研究事業の成果の検討を行い、2023年度調査対象・調査項目の選定していく中でICT・介護ロボット導入および効果的活用へ導く要因を検証していくこと、調査項目選定について、ICT等導入及び活用を行う法人（介護施設）の職員による座談会もしくはヒアリングを検討していくことを検討している旨の報告がありました。ディスカッションでは、他ユニットとの研究の合同として、高齢者グループや地域包括ケアグループとの共同研究のあり方も検討していくこと、地域福祉グループとしてどのように研究を行っていくかの発題がなされました。

また、介護施設側がICTを導入する目的として「業務改善」がある一方、地域福祉分

野では地域公益事業としてICTを用いてどう制度のはざまにいる人を地域福祉とつなげていくかなどのソーシャルワークの視点が大切になってくることが共有されました。

第4回定例研究会は9月2日（金）に開催されました。加山グループ長より、本年度の社会学部紀要に投稿した「社会福祉法人の地域公益活動をめぐる近年の政策・実践・研究の動向」をテーマとした報告があり、ICTについても言及がありました。報告内容は、今日の地域公益活動にいたる系譜を政策・実践・研究の面で概観し、中でも法人制度改革や地域共生社会の実現のための政策化が活発化した2010年代以降の文献・学術論文、行政文書、資料等からの3つの論点に整理することを目的としたものの報告でした。山本研究分担者からは、社会福祉法人は地域公益事業が本旨である中で発展してきた位置づけがある一方で居住というところで地域に住めない人をそこに追いやっている側面があること、ホームレスの無料診療所等の例もふまえ社会福祉法人対地域での居住という構図もあり、すべてが貢献という側面で捉えられない面もあるのではないかというコメントがなされ、本テーマに関して居住の観点からも検証が必要である旨の問題意識が共有されました。

今後、10月30日～11月1日の日程で地域福祉分野におけるICT活用の先進事例として福岡市社会福祉協議会、福岡市地域包括ケア情報プラットフォームのほか、大分県内の実践事例にも視察を予定しています。



各研究ユニット・グループの様子－子どもグループ

子ども

グループは今年度からライブデザイン学部の内田千春先生、南野奈津子先生を迎え、新たな研究内容の加えたことによって、研究の幅が一層広がりました。

昨年度を引き続き、森田明美先生（客員研究員）をリーダーとしたチームは、世田谷区との協定にもとづく研究を継続的に進めており、世田谷区保育実践のネットワーク化や質の向上に向けた毎月1回の取り組みの振り返り、区内認可保育所保育士の児童福祉問題への気づきや支援方法に関する研修、母子支援施設の支援の在り方に関する研修を行い、これまで培ったシステムを広げる取り組みを年間8回開催予定です。また、今年度8月からは、世田谷区との共同研究の一環として新しく立ち上げた、内田千春先生をリーダーとするチームでは、世田谷区立保育園における外国につながりがある子どもや親への支援に関する実証研究をはじめました。具体的には、世田谷区立保育園2箇所の協力を得て、2歳4歳の中国語、英語を母語とする子ども相互

の関係と子どもと保育士、家族と保育所の言葉の「壁」の解消のため、ポクトークなど（ICT翻訳器械）を利用し、その効果の検討を進めています。なお、世田谷区の保護者へのヒヤリング調査に関わる倫理審査を大学に提出し、研究の手続きを進めています。

内田チームは、世田谷区との共同研究に加え、北区との保育施設と連携をし、保育関係者との打ち合わせを行い、今後の研究活動の方向について検討を行っています。

南野チームは、外国につながりがある子どもたちを対象に研究活動を行っています。10月19日（水）はオンライン上で、「非正規滞在の子ども時代」をテーマとした研究会を開催しました。詳細は下記の左図をご覧ください。

子どもグループの公開研究会として、10月29日（土）にロヒンギヤのこどもたちのこどもや子育ての支援に関する研究会を行いました。詳細は下記の右図をご覧ください。

“非正規滞在の子ども時代”

日本社会において、子ども時代を非正規滞在（母親が外国人）として過ごすことは、本人にとってどのような経験なのか、その経験が現在に与える影響とは何か？ ケーススタディと当事者が語る機会を設けます。

ゲスト：石井陽介氏 聞き手：南野奈津子（東洋大学）

◆日時：2022年10月19日（水）

☆午後8時から午後9時 zoom による

◆締切 2022年10月17日（月）

◆定員 50名（先着順）

◆申込・お問合せ 大橋（おおはし） masapsw@gmail.com

主催：滞日外国人支援を考える会（代表：南野奈津子）

共催：東洋大学福祉社会開発研究センター（子どもユニット）

トーク LIVE!

CDWS子どもサブユニット公開研究会

日本で暮らすロヒンギヤの子どもたち

日本には群馬県館林市などに400人ほどのロヒンギヤの人たちが住んでいます。イスラム教徒のロヒンギヤの子どもたちが日本で暮らす中での課題について学び、外国につながる子どもたちの様々な権利が守られるにはどうすれば良いのか、共に考える機会を持ちたいと思います。

日時：10月29日（土）15:00-17:00（オンライン）

ZoomミーティングURL：
<https://us06web.zoom.us/j/85682791538?pwd=a0pFZ2VQUjJFejN3U0VUSQ4t4TG51dz09>
 ミーティングID: 856 8279 1538
 パスコード: sK9w8p

講師：長谷川 留理華さん
 ミャンマーのアラカン出身。2001年、ミャンマーでロヒンギヤへの弾圧が激しくなったため、小学校6年生で群馬県館林市に移住。現在は子育てをしながら、通訳や翻訳などの仕事に従事。2013年に日本国籍を取得。

主催：東洋大学福祉社会開発研究センター
 協力：人間科学総合研究所子どもの権利研究会
 問い合わせ先：人間科学総合研究所 Mail masapsw@cdws.jp 担当 夢（いん）/ 風（な）



各研究ユニット・グループの様子－理論研究ユニット

8月 1日に対象論G第2回研究会「日本における居所不安定女性のホームレス化過程」（報告：川原恵子 研究分担者）が開催されました。今後の研究に向けて、その問題意識や先行研究、研究計画について報告がありました。日本の公式な「ホームレス」の定義から範囲を広げることにより、今まで見落とされてきた女性や家族の居所不安定層を捉え、かれらの居所の不安定化のプロセスを明らかにする必要があると指摘がありました。

10月 3日に対象論G第3回研究会「再犯防止とウェルビーイング－アジアにおける司法福祉実践と価値の研究」（報告：戸井宏紀 研究分担者）が開催されました。今後の研究実施に向けて、その問題意識や研究計画について報告がありました。現在、地域共生社会実現に向けた取り組みの一つとして、再犯防止を捉えていくことが求められています。そして、刑事司法と社会福祉の制度・政策がこれまで以上に相互に影響を及ぼし合う状況のもと、再犯防止とウェルビーイング実現という司法と社会福祉の価値・目標がどのような関係にあり、それがアジアにおける司法領域へのソーシャルワーク実践にどのような影響を与えているのかを明らかにする必要があると指摘がありました。

10月 10日に歴史・原論Gの第2回研究会「福祉の論理」（発表者：稲沢公一研究分担者）が開催されました。

今年の夏に出版された同名の著書『福祉の論理－「かけがえのなさ」が生まれるところ』の内容の一部について、ご報告いただきました。ここでは、普段、私たちが慣れ親しんだ帰納的方法ではなく、演繹的方法がとられていることが大きな特徴です。

稲沢先生によれば、私たちが生きていくうえで採用している基本方針には、市場ルール（ $R \rightarrow R+a$ ）と福祉ルール（ $\text{非}A \rightarrow A$ ）があります。そして、それらを根底で支えているものが「 $A=A$ 」（形式論理）と「 $A=\text{非}A$ 」（福祉論理）です。

この二つのルール（論理）を中心に、その成り立ちなどについて、活発な議論が行われました。

書籍『福祉の論理－「かけがえのなさ」が生まれるところ』

URL : <https://www.seishinshobo.co.jp/book/b10013858.html>





各研究ユニット・グループの様子－障がいグループ

9月 13日（火）、障がいグループの第2回研究会が開催されました。福祉社会開発研究センターでは、ICTやロボットを活用した社会における「つながり」の創造と開発を目指した研究を行ってきました。その一環として、障がいグループは世田谷区と共同し、医療的ケアが必要な児童に対する分身ロボットOriHimeを用いた出席の試みについて研究を行っています。

本研究会では、現在、実際にOriHimeを使用して大学の授業に参加している中島寧音氏を講師に招聘し、「寝たきりだからこそ出会えたもの」と題したご講演をいただきました。公演では、OriHimeパイロットとして分身ロボットカフェでアルバイトをされている

様子や、これまでの学校生活をどのように送ってきたのかを説明いただきました。大学生活では、OriHimeを使用して、講義を受けている様子や旅行に行ったエピソード等が語られ、教育現場でOriHimeなどのICT/ロボットを使用する価値や可能性、つながりの多様性について、活発な議論が行われました。





各研究ユニット・グループの様子－高齢グループ（海外出張）

実践

研究ユニット高齢グループの嶺也守寛研究分担者が、9月6日（火）～9月15日（木）の間、スイスのGrandsonにあるISNA-Suisseのスヌーズレン研修施設において、スヌーズレン資格認定セミナーを受講し、スヌーズレン教育がどの様に行われているかの調査を行いました。

スヌーズレン資格認定セミナーの講座は、「0歳～6歳までのスヌーズレン：Snoezelen avec les enfants de 0 a 6 ans」と「移動式スヌーズレン及びボディケアのためのスヌーズレン・スヌーズレンのある暮らし：Vivre le Snoezelen – En salle ainsi qu’en mobile, et Snoezelen dans les soins corporelle」の2講座を受講し、更に「沖縄」をテーマにしたスヌーズレンセッションを創作・実施した結果、嶺研究分担者はスヌーズレン国際資格を取得いたしました。

本出張により、対象者によってスヌーズレンセッションの作り方を変える重要性を把握し、今後のスヌーズレン研究における知見を得ることができました。

日本では障害者施設や特別支援学校などでスヌーズレンが行われていることが多いですが、高齢者施設でスヌーズレンを行っているところは少ないのが現状です。フランスでは認知症対策の一環としてスヌーズレンが導入されているところが多くあります。また、日本ではスヌーズレンをどう実践して良いのか分からないと言ったご意見も良く耳にします。それは、スヌーズレンを体系的に学ぶ場所や機会が圧倒的に少ないからです。今後は、スヌーズレンを正しく学び、現場での実践ができる様に、我が国独自でのスヌーズレンの資格認定セミナーを整備することが肝要かと思います。





各研究ユニット・グループの様子－国際福祉機器展

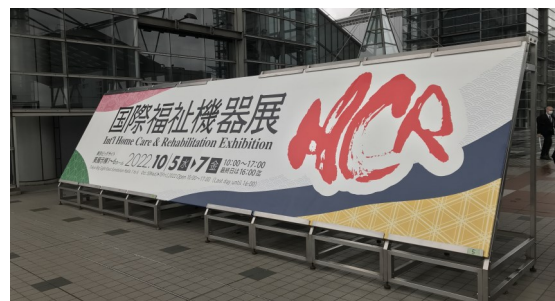
10月

5日（水）、国際福祉機器展で、東洋大学社会福祉学部の卒業生が登壇者として参加している「介護ロボットの開発・実証・普及のプラットフォーム／ニーズシーズマッチング支援事業のご紹介」という出展社プレゼンテーションに参加しました。

この事業は、介護人材の不足が社会問題となる中で、その解決策の一つとして、ICTや介護ロボット等のテクノロジーの活用が期待されています。一方で、介護の現場ではどのロボットや機器を導入すればいいのかわからない。また、開発企業側では、介護現場には

どういったニーズがあるのかわからず、技術力やノウハウ（シーズ）を生かせない。そういった状況がありました。そこで、介護現場のニーズと開発企業のシーズのマッチングを行うのが、介護ロボットの開発・実証・普及のプラットフォームであり、ニーズシーズマッチング支援事業であるそうです。

関連HP：<https://www.kaigo-ns-plat.com/>



お知らせ（今後の研究会等の予定）

- ◆ 11月2日に政策論グループ第1回研究会が予定されております。
報告者：藪長千乃 研究分担者 テーマ：フィンランドの保健医療福祉改革について
<https://toyouniv.webex.com/toyouniv/j.php?MTID=md89b8371271f15a0d451f846616d4a71>
- ◆ 11月10日に政策論グループ第2回研究会が予定されております。
報告者：伊奈川秀和 研究分担者 テーマ：船員の社会保障における相互承認
<https://toyouniv.webex.com/toyouniv/j.php?MTID=m0659b549f6231598ac85dfd82820619a>
- ◆ 12月9日から古川研究分担者（高齢G）が、福祉分野におけるICT活用に関する日韓連携の可能性を探ることを目的とし、韓国で客員研究員のペグ教授との意見交換、福祉施設の見学および実践者との意見交換を行ってくる予定です。【詳細については次回】



発行：東洋大学福祉社会開発研究センター

- ◆ 〒112-8606
- ◆ E-mail：cdws@toyo.jp
- ◆ 東京都文京区白山5-28-20
- ◆ TEL：03-3945-7504